
リリカルうー、マジカルうー、ロボトルうー、ファイトおー!!!!

ハル マキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルうー、マジカルうー、ロボットうー、ファイトおー！！

【Nコード】

N0107T

【作者名】

ハル マキ

【あらすじ】

メダロット、それはテクノロジーが生み出した、全く新しいロボットである。

魔法少女、それは魔力を消費してプログラムを発生させる超科学を操る少女の事である。

ティンペットと呼ばれる基本フレームに、人工知能メダルを搭載。デバイス、魔法の使用の補助として用いるサポートツール。

更に様々なパーツを合体させる事によって、無限の能力を引き出す

事ができるのだ！

更に様々なプログラムを組み合わせる事によって、無数の魔法を使う事ができるのだ！

この物語はそんなメダロットと魔王少女の友情と努力の物語である。
（これは素人作者の妄想で作られています。こんなのはおれの知っているメダロットじゃない、なのはじゃないと感じた方はすぐに閉じるの×ボタンを押してください。）

プロローグ：転生してもよろしいですね？（前書き）

初めまして皆さん。ハル マキです。この作品は処女作件作者のとうしようも無い妄想でもあります。それでも生暖かく見守ってくださる方はどうぞ見て行ってください。

プロローグ：転生してもよろしいですね？

目が覚めるとそこは不思議な空間だった。

「おつかしなく、たしか貫徹でメダロットDSのカブト、クワガタの両バージョンをクリアしてからベットで寝たはずなんだが・・・」

「あのおく、すいませえくん」

混乱した頭で考え事していると、後ろから声をかけられた。振り返ってみると、そこには・・・地面から浮かんだ巨大な石像がいたんだ。

「なかなかリアルティーを感じる夢だな、宙を浮いているとはいえ、ここまでリアルな石像が出てくるとは。」

なんて自分の想像力に感心していたところに

『いえく、夢じゃないんですう』

と前の石像からさっきの声が聞こえた。

「おおく、この石像しゃべったよ。しかも可愛い声で。」

見た目は何ての、漫画版メダロットのマザーみたいな感じだな、うん。

『フエーン、話を聞いてくださいよぉ。ふえええん（泣）』

「なんか泣き出しちゃったよ……。わかったわかった、オニーサンが話聞いてあげるから泣くな。」

『グスン、ホント？』

「ホントホント、オニーサンを信じなさい。」

『ウワァイ、分かりましたぁ（笑）』

うんうん、声だけとはいえ女の子は笑顔でなくっちゃね。それに機嫌もよくなったようだし。取りあえずお話を聞いてみましょうかね。

「それで、いったいどうしたのかな？どうも夢じゃないらしいけど。」

「

『はい、実はあゝ』

で、話を聞いてみたところ、自分がなぜここにいるのかを知る事ができた。

メダロットDS、貫徹、クリア

←

眠い、ベットダイブ、寝る

←

隣人、爆弾制作、爆死

←

俺、巻き添え、爆死

←

死後の世界、俺到着、死因説明↑今ココ

だそうだ。

隣の部屋の兄ちゃん、さわやかな好青年だったんだけどなあ、意外だわ。うんうん。

『ご理解いただけたでしょうかあ』

「あゝ・・・、うん、まあ、どいつた経緯かつてのは分かった。まあ、死んじまったのんはしょうがないな、メダロット3DSをやるれないのは少々未練だがね。」

『あのおゝ、怒らないんですかあ』

「いやゝ、ウチの親父が昔こう言っていたんだよ。」

”いいか、人間いつかは必ず死ぬ。やりたいことやりきったやつあ本望だろう。寿命で死ねればマシな方だろう。

だがな、世の中みんなそんな風に死ねたりするわけじゃねえ。病気、事故、戦争・・・、例えを上げりゃ切が無い。どうして自分なんだ、なんであいつが生きているんだ、とか考えるかもしれんな。

・・・でもよ、死んだ後もそんな風にジメジメしてたってしょうがないだろ。どう考えたってカツコワリイーだろ？

だったらスッパリ割り切って成仏したほうがカツコイイだろ。だからよ、お前は好きに生きる。それでもって死んだらスッパリ割り切れいいな！！”

そんなことを俺の頭に手を置いて笑いながら言ってたな。ゴツゴツした岩の様な手だったけど暖かったな。

見た目はヤの付く自営業の人だったのに・・・。

『なんだかあゝ、すごいお父さんだったんですねあゝ』

「おう！！最高に自分勝手に最高にカッコイイ親父だったよ！！」

お袋には激弱だったけどね。絶対服従だったしな！！（笑）

『でもあゝ、困りましたねえ』

「ふむ、どうして？」

『実はですねあゝ、天国や地獄への受け入れなんですがあゝ、ちゃんと此方で決められた死亡内容で来てもらわないといけないんですよあゝ。』

「ふむふむ、それでそれで。」

『ですがあゝ、あなたの死はあゝ、そのおゝ、えゝとですねえゝ。

（汗）』

「ん？どうした？」

『・・・よ、予定外だったんですうゝ（泣）』

「・・・すまない、よく聞き取れなかったんだ、もう一度言うてくれ。」

『予定外だったんですうゝ、本当に申し訳ありません（泣）』

「……はっ、何てことだ、まさか俺の死が予定外だったとはだが、さっきあんなことを言った手前、原因の追及も、怒りをぶつけることもできん……」

『そ、それですなえ、此方の勝手な都合で申し訳ないのですがあ、記憶を持ったまま転生といった形でえ、別世界でもう一度生き返ってもらおうかと思うんですよあ。』

「へ、生き返れんの？」

『はい、お詫びもかねていくつか要望も叶えますよあ』

「うーん、でも記憶ありで転生でしょ。自分以外としてとしてやり直すのもなんだかな。だいたい、別世界って何？俺のいた世界じゃないわけ？」

『その件に関しては大丈夫ですう、もう一度本人として生まれてもらいますのでえ、問題はなにかとお』

「いや、そういう問題でもないんだが……」

『……ヒック、こ、こりえが此方でできりゅ、グズ、最低限のことなんでしゅ。ゆるしてください。うえ……………ん（大泣）』

「……………はあ、分かったから、転生するから。取りあえず泣くな。」

『ヒッグ、ほ、ホントですかあ（泣）』

「ホントホント、最初にも言ったけどオニサンを信じなさい。」

『あ、ありがとうございましゅ、うれしいでしゅ（泣）』

今度はうれし泣きを始めたよ。でも石像から声が聞こえてるから、ホラー通り越してシユールにしか感じん。

見た目って大事だね。うん。

『ズズーツ、ゴホン、この姿はあなたの中イメージからあ、偉大だと思えるものを基にした姿です。本来の姿ではありません。プンブン。』

あれ、おかしいな、今声出してないよ俺。なぜ？声に出してたか？

『一応、神様なのでえ、心位は読めますよあ』

「な、なんだってえーーーーー？！神だとおーーーーー！
「――！」

『そうです神様です。』

「確かに、転生とかさせようとしてたから、まさかと思ったが。」

『あのお、私が神だと問題があるんでしょうかあ』

「いや、随分ゆるいからさ、イマイチ神様とまでは思えなくてね。」

『そんなあ、酷いですよあ』

「自信を持って言おう、予想していても、自分が死んだ事より衝撃的だったと!!」

『あんまりですううう（泣）』

ありや、面白いとはいえからかいすぎたかね。それに、そろそろ話の方も進めたほうがいいかもしれないな。

自分の今後の事についてだしね。おーい、話を進めるぞー。泣きやめ。

『ううう、泣かしたのはあなたじゃないですかあ。もーいいですうう、話を進めますう。プンプン』

「はいはい、そっちのミスを許してあげる代わりと思って、これ位のことは我慢なさいな。で、転生の件だけど自分としてまた生きていくことは分かった。で、その他にいくつかの要望を聞いてくれるらしいが、例えばどんなものなんだ？」

『あ、はい、その件ですねえ。ご説明しますう。』

はい、ここで再び説明タイムがはいましたー。

？自分の容姿と性能の調整

？特殊能力の付加

？欲しいモノの獲得

？本来の俺の残り寿命数の数だけ上記の事が出来る。

？俺の寿命が105で、享年が24だった為81回可能

「・・・そんなに願いを叶えて大丈夫か。」

『大丈夫だ、問題ない』

なんでそこだけ間延びがないんだよ。しかも、なぜにエ○シャイダ・

「しかし、81個も願いも欲しい物も無いぞ。それに特殊能力の付加って何さこれ？」

『え〜とですねえ〜、例えば漫画やアニメとかに出てくる超能力や魔法とか言ったものがポピュラ〜みたいですねえ〜』

「ポピュラーで・・・。なんか何回もこういった転生（こゝろ）があるみたいな言い方だな。」

『はい〜、私は初めてですけどお〜、他の神様などが転生させる時にやっているそうなんです〜。このマニュアル本にもかいてありますう〜。』

おいおい、そんなに失敗ばかりしていて神様達は大丈夫なのか。そして何よりマニュアル本でなんだよ・・・。頭痛くなってきた。

『それなりの理由もあるんですよ〜。転生する世界で危険から生き延びるために〜とかあ〜？』

「なにそれ、危険な世界に行かされるの。ヤダよ俺。」

「大丈夫ですう、転生先はあり、リリカルなのはのせかいですう。」

「はい？」

「しらないんですかあ？」

「いや、知ってるけどさ。．．．そうかあゝ、リリカルかあゝ。」

『そうですうゝ、リリカルですうゝ』

「……………なんでやねえ——ん!!!」

ブログ：転生してもよろしいですね？（後書き）

次回からしばらくはメダロットの開発編を掲載していこうかと思います。

なので、原作キャラは出ますが、活躍はあまりしません。
それでは、また次回。

第1口ボトル：誕生してもよろしいですね？

(Side ???)

俺の名前は六角^{むつかど}一善^{いちよし}、？六角ホビーというおもちゃ会社を営んでいる。

俺が一から始めた会社ではあるが、商品の売り上げも悪くはなく、経営状況も安定していると言ってもいいだろう。

そんな俺だが今全力で走っている。

そりゃあ、もう死に物狂いでだ。道行く人達はそんな俺の姿を見て道を譲ってくれている。これも日々の行いの良さが関係しているに違いない。

決して俺の顔が怖いから、避けているとかそんな事ではないはずだ。

。。。うん、絶対。。。多分。。。。

と、とにかく俺は走っている。なぜなら愛する女房がもうスグ出産すると聞いたからだ！こんな時こそ俺が傍に居なくて如何するといふのだ！！仕事をサボ。。。、じゃない部下に任して病院に向かっているという訳だ。

待っててくれよ、My Honey!!

- - -
- - -
- - -

はい。。。調子乗っていました。

ただいま妻のいる出産室前で正座をさせられています。何仕事サボってんだと殴られてしまいました。。。。

出産間近の妊婦が出せるパンチじゃないぞあれは。。。 (汗)

いや、でも、もうすぐ自分の子供が生まれるんだよ！呑気に仕事な

んてできないよ！！俺は悪くないはずだ！！それに妻のそばにも
いたかったし……。

「そう思うなら、せめて早退届くらい出していただきたいですね。
六角社長。」

「うん、そうだね……。君の言う通りだよ二耗草 大日 副社
長。」

彼の名前は二耗草 大日。我社の副社長で、俺の奥さんの弟……。
まあ義理の弟というやつだ。でもさあ、おつかしいなあ？

「あ、あゝ、なんで此処にいるの？副社長には仕事を押しつ、じゃ
ないや任せてきたはずなんですけど？」

「姉に言われて来たんですよ。出産が終わったら、社長を連れて会
社に軟禁しろとね。」

え、何それ？怖いなんてもんじゃないよ？

「何それ！！あんまりだよ！！頑張った妻と生まれてくる子供に愛
情を注ぐくらいの時間位頂戴よおおおおおおおおおお
！！！！！」

「うつせーよ！！バカが！！大体仕事を今まで貯めてたテエメーが
ワリイーンだろうがあああああああああ！！！！！」

「しょうがないだろ！妻の容態とか、子供の名前とか、妻の容態と
か、子供の名前とか、妻の容態とか、子供の名前とか……。とに
かく集中なんか出来るかよ！！！」

「妻の容態と、子供の名前の二つを何回も言っただけじゃねえーよ！
！こんの家族バカが！！」

「ありがとう！！最高の褒め言葉だ！！」

「誇った顔してんじゃねえ！！」

「その二人！！院内ではお静かにお願いします！！」

「ス、スイマセン……」

「たつく……、まあ、気持ちは分からなくてもいいですけどね。」

「……ふん、昔は俺らの背中にくっついてたデチュデチュ小僧
がイッパシの事を言う様になるとはね。恋は人を変える魔法でっ
か（笑）」

「んなあつ！！昔の事掘り返してんじゃネエ！！大体俺とあいつ
の関係はそんなじゃ……。」

「はいはい、わかったわかった。それと、ありがとな……、緊張
もだいぶ無くなったわ。」

「ん、まあ、初めての子供だからな……、しかも双子ときたもん
だ、無理もないですよ。」

「そうだな……、そこは親父つてのがいなかったからよ、父親な
んで出来んのかって柄にも無くビビッてたしな。」

「しっかりしてくださいよ。それでも元スクリューズの特攻隊長ですか？ 人間戦車一善号 の名が泣きますよ。」

「それを言ったら、お前は情報参報 朧鼠の大目 だろ。」

「それで今頑張っている姉さんが・・・」

「スクリューズ総長、 狂い歌姫 凶歌 事・・・」

「「六角 むつかと きょうか 恭華とはね〜。」」

と、喋り終わったタイミングで、点灯していたランプが消えた・・・。
。 出産が終わったということだろう。

看護師の人に中に入るように言われ、少し震えた足で部屋に入る。
そして入ってすぐに見たのは、出産で疲れているが凛々しく笑う妻と、大泣きしている双子の赤ん坊だった。

(Side end)

(Side 主人公)

ウ〜マ〜レ〜タ〜ゾオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

いや〜、さすがに出産中に意識が覚醒するとは思わなかったね！！
頭を出す時が痛いなのって・・・。

まあ、取りあえず俺、誕生！と赤桃見たく叫んだけれど

「オギヤアアアアア！！」

位しか言えないんだけどね！！！！しかも勝手に泣き続ける仕様です。

うん、止まんないよ・・・。

しかし、変な感じだね、生まれるってのは・・・。しかも、もう一度自分の母親から生まれるってんだからなおさらだよ・・・、ねえ？

でも、まあ、その、なんだ・・・、全部が全部同じってわけではないようなんだ。

だって、カアちゃん若いよ！！俺を生んだ時って25位の時じゃなかったっけ？どう見ても十代後半にしか見えないよ！！

・・・リリカルか。リリカルの効果なのか！桃子さんとかリンディさんとかプレシアさんとかと同じ様なやつなのか！！

そして極めつけはこれだよ！！俺の前世は一人っ子だったのにさあ、双子の妹がいるとは予想外だよ！！どうなってんの！！神様説明プリーズ！！

『はい、説明しまあす。なぜ双子さんかといいますとあ、本来生まれるのはあ、妹さんだけだったんですよあ』

え？そうなの？

『それでえ、そこにあなたという存在をあ、こちらの世界に誕生させるためにい、双子にしましたあ』

なるほど、なるほど。この子はこの世界で俺の代わりに生まれる予定だったといった訳か。さっすがパラレルワールド。何でも有だね！！

『それからあ、両親が同じ存在でもあ、親類の人達が違ったりい、知っている人の関係が違ったりするかもしれないですあ』

まあ、パラレルワールドだし、しょうがないよね。

了解した、神様大佐！！これより第2の人生という任務を全力で遂行する！！また後で連絡するからよろしく頼む。では。(・ω・)

くゞ敬礼っ

『はあゝい、りよゝかいでえゝす』

さてつと、それじゃあ今g「キョオオオオカアアアアア！！！！」

「病院で騒ぐんじゃないー！！！！」(ドガツ！！)

さすがは我が母だ、出産したばかりなのに、もう親父を殴り飛ばしているよ……。しかも妹はそれ見て笑っているし……。(汗)。

「まったく、余計な体力使わせるんじゃないよ……。ほら、いつまでも倒れてないで、とつと立ちな。みつともない。」

「倒れたのは俺のs「あ” あん！！」……。何でも無いです。」

ふむふむ、この世界でも力カア天下の様だ。見事に尻に敷かれているよ……。あ、カアちゃんが毒舌吐き始めた。うつわあ……。親父哀れだなあゝ。どんどんへこんでつてるぞ。

まあ、両親共に元気で何よりだ。前世じゃ親孝行する前に死んじゃつてたからね……。今回は精一杯親孝行するよ！！！！

「さあ、我が子達よ！！今から名前を付けるぞ！！」

おお、いつの間にか立ち直ってるよ！！それに命名式か……。自分名前がつけられるところを拝めるとは、なかなか感慨深いな。

「男の子の方は六角^{むつかど}一歩^{いっぽ}、六角^{むつかど}電華^{ひょうか}だ！！！！」

こうして俺こと六角 一歩の第二の人生がスタートするのであった。

(Side end)

第1ロボット：誕生してもよろしいですね？（後書き）

はい、主人公の名前を前回出し忘れてたので、こんな形で出しました。

今回は少し時間が進みますが、よろしいですね？
それでは、また次回。

第2口ボトル：広めてしまってもよろしいですね？

(side 一歩)

みなさん、一歩です。某ボクシング漫画の主人公と同じ名前だけど関係性は一切ないので期待しないでください。デンプシー・ロールやガゼルパンチとかは溢れるロマンを感じるけどね(、・ω・、)キツリ

さてさて、誕生してセカンド・ライフを始めてから早10年の月日経ちました。いやゝ、色々あったのよ、これがさ。

叔父さんがメダロット社の社長と同じ名前だったり、親父がカァちやんにアイアンクロウくらってたり、親父がオモチャ会社経営してたり、親父がコブラツイストくらってたり、住んでる所が海鳴市だったり、親父がタワーブリッジくらってたり・・・。

うん、半分近くが両親のやり取りだからここで止めるは・・・。とにかくいろいろあったんだよ！ホントだよ！

そんな僕は今・・・

「ゴラァ！！こんの腐れシスコン野郎が、今日こそ息の根を止めてヤラァ！！」

「それはこっちのセリフだ、今日という今日は完膚なきまでに叩き潰してくれる！！」

「よく言っただ！！表出る！！！！」

タイムンしようとしています。

・・・何故こうなった！！！！いや、相手が気に入らないといった理由もあるがなんでこんなガキのくせに高スッペックなやつと喧嘩し

なくちゃいけないんだよ！！え、相手が誰かって？あの腐れシスコンの名前は……

「ぬりい攻撃してんじゃねえーぞ、こんのおバカ恭也！！！」

「ふん、偉そうな事を言うなら俺の攻撃を避けてから言え！！！」

はい、我らがシスコンキングこと、高町^{たかまち} 恭也^{きょうや}君です。

そもそも、コイツとの付き合いは六歳の時にコイツが入園してきた時に遡る。友達もいないだろうからコッチから歩み寄ろうとしてやったのに、この野郎ときたら「僕に関わるな。」て言ったんですよ

(#・・)ムカツ！！

いやまあ俺も、ムカツときていきなり頭突きをかましたのは良くなかったけどさあ……。まあ、なんだ、それが切っ掛けでクダラナイ事で喧嘩するようになったという訳だ。

とにかくこの腐れシスコンキングを黙らせてから、今の俺の現状をゆっくりと報告しよう。

(side end)

(side 電華)

ふう、毎回のことながら懲りずによく続きますね……。

「まゝたやってるよ、あのバカ二人は……。電華あゝ、止めなくていいの？」

そう私に尋ねてきたのは友人の一人である荒道^{あらみち} 歩^{あゆみ}さんである。両親同士が昔からの知り合いなのもあってか、私と兄である一歩とは幼稚園入園前からの幼馴染であり、兄の将来の花嫁候補でもある。

本人達は否定しますが・・・。

「大丈夫ですよ歩さん。放置していても問題無いかと、どうせ決着も着かないでしょうし。」

「まあ、そうだけどさ・・・。」

「それに怪我をしたなら、歩さんが兄の看病をしてくだされば問題ありませんしね。」

「んなあ?!何言ってるのアンタは!!!!」

「大丈夫ですよ。私たちの両親はお二人の関係については認めていらつしゃいますので。」

「だあゝかあゝらあゝ、私たちはそんな関係じゃないって言うてるでしょが!!!!」

「ふふ、そういう事にしておきます。」

「はあゝ、勘弁してよ。まあゝ。」

「でも、そろそろ二人を止めたほうがいいんじゃないかな?もうすぐ次の授業もあるし・・・。」

そして彼女がもう一人の友人である秋葉原 苗さん。我が六角ホビーズ改メダロット社の第1メダロット開発室室長のメダロット博士こと秋葉原 亜土夢のお孫さんである。

「・・・、苗さんがそう仰るのなら仕方がないですね。メダロット

転送。」

そして転送されてきた私のメダロットであるレディジェットのスカイにメダルをはめ込んだ。

『お呼びでしょうか、電華お嬢様。』

「スカイ、申し訳ないのだけど、外の馬鹿二人を止めてきてもらえる？ 方法は問わないわ。」

『一歩様と恭也様をお止めすれば良いのですね。畏まりました。』

そう言つて教室の窓から飛んで行つたスカイを見送つた。

「わざわざスカイを使わなくてもよかったんじゃない？ 窓から声をかければ十分聞こえると思うけど。」

「少しは痛い目を見ないと凝りませんからね、あの二人は。」

「あはは・・・、確かにね。」

「まあ、これ位で今後も喧嘩をしなくなることは、有りえないでしょうけどね。」

「「確かに・・・。」」

そして、私たちは外でスカイの攻撃から必死で逃げ回っている二人をチャイムが鳴るまで眺める事にした。

(side end)

- - -
- - -
- - -

(side 一步)

酷い目にあつた・・・いくらなんでも空中から攻撃は無いだろ、
雪華の前世はきっと血も涙も無い雪女か何かに違いない。

まあ、この事についてはここまででいいか。

それじゃあ、みんなも気になっているメダロットについて説明して
いこう。そもそも、なぜ【リリなの】の世界にメダロットがいるの
かと言うと、ぶつちやけ俺が原因です・・・。

いやね、何も一人で全部作つた訳ではないんですよ。

俺が一人でやつたのはメダロットに使うメダルと装甲に使うスラフ
システムの開発と、メダロットの基礎概念提示しただけだし。他の
事は、ティンペットとパーツの開発ではメダロット博士と、物質の
浮遊と転送の技術はヘレケ博士とやつただけなんだから・・・。
でも、焚付けたのは俺なんだけどね（＊ ＊）テヘ♪

いや、叔父さんの名前から考えてもしかしたら他のメダロットの登
場人物がいるかもしれないと思って探してみただけど、大当たり
だったよ。

まあ、二人とも結構有名な科学者だったからすぐに見つかったけ
どね。

取りあえず二人にメダロットのデータを少し送って勧誘してみたん
だけど、すごい勢いで飛びついてきたね。あの時の二人の顔はロマ
ン溢れる男の顔だったとだけ言っておこう。

少し残念なことがあるとすればふしはら節原 ゲンゴロウ源五郎 博士がすでに亡くな

つてたことかな・・・。

それでも彼の昆虫に関するレポートや研究データが無かったらスラフシステムは完成できなかっただろうね。やっぱりすごい人だ。うんうん。

そんなこんなで俺が5歳の時に開発を始めたメダロットだが、今では世界中のいたる所で販売されるようになった。開発者としても、一人のメダロッターとしても大変うれしい限りだね。

それに、メダロットを販売するにあたって我社六角ホビーズも？メダロット社に改名したしね。

売り上げも止まることがないからお金が入ってくる入ってくる。で、今では世界的大手企業の仲間入りって感じかな。

まあ、これで俺の第一目標＜世界中にメダロットを広める＞は達成されたといつてもいいだろう。

これも神様から貰ったチート頭脳とメダルの開発方法のおかげだね。そつえば、俺が神様に貰ったモノはまだ説明してなかったな。

取りあえず紹介しよう。

まず、メダルの開発方法だ。原作ではメダルとメダロットは宇宙から来た物とされているから自分で初めから考えて作り出そうとしても、かなりの年月が掛かると思い、最初に作成方法をいただいた。

まあ、メダル以外ならそんなに時間は掛かんかったかもしれないけどね。

次に金運を上げてもらった。やっぱり、何を作る場合でもお金は必要になってくるので、金運パラメータをMAXにした上に、某運命ゲームに出るキンピカ王の黄金律を追加したような感じになっている。おかげで、いくらお金を使っても困らなくて済む。

他には肉体スペックの向上と、頭脳スペックのチート化、何かを作ることに関しての才能位かな。おかげで身体能力はあの高町恭也と

も互角に渡り合えてるしね！！

魔法方面についてなんだが・・・、魔力量を0にしてもらった。なぜかって？俺は考えたどうすれば原作にカッコイイ介入をする事が出来るのか・・・。

簡単なことだ、一人のメダロッターとして介入すればいいんだと、俺は悟ったね。今からでもあのKY執務官を魔法なしでイビリ倒すことが楽しみでしょうがない。くくくくくくくく。

もうすでにそっち方面の計画も進行している。ああ、早く家に帰って”アレ”を完成させたい！！！！

・・・ま、まあ、他にもまだ願いを叶えてもらったりすることは出来ただけど、そんなをお願いすることも無かったんで、生き返った後も可能な限りサポートしてくれて頼んでみたんだが。

何はともあれ、原作開始まで楽しい学園生活とメダロットのさらなる技術発展に力を注ぎますか！！

(side end)

第2口ボトル：広めてしまってもよろしいですね？（後書き）

え、申し訳ありません。

ホントはメダロットが開発されるまでの話を書こうと思っていたのですが、現在の实力的では上手く表現できないと感じ、断念しました。

期待して見てくださっている方々にはひたすら頭を下げる次第です。取りあえず、ネタは頭の中にあるのもっと煮詰めてから書いていきたいと思います。

それでは、また次回。

第三口ボトル：外堀埋めてもよろしいですね？

(side 一歩)

「たつだいまあ、俺がない間異常はなかったか？」

『おつ帰りいゝ、一歩。今の処は特に問題は無いわね。むしろ問題無さ過ぎてヒマな状態よあゝ。』

「ヒマって事は平和ってことだろ。いいことじゃん。」

彼女の名はウルド。この世界で一番初めに生まれたメダルであり全てのメダロット達の母親である通称マザーメダルである。

彼女は自由奔放で、面白ければ何でも手を出す困った性格をしている。

そんな彼女の他にヴェルダンディー、スクルドといった二体のマザーメダルが存在している。

彼女たち三体のマザーが我社のメインコンピューター”Temple”と直結されている。

そのおかげで、我社に対しての悪意ある行為の対応や、あらゆる情報の入手などが可能な超スペックとなっている。

どれくらいすごいかって？別の次元世界にある時空管理局にも余裕でハッキングすることが可能なんだぜ。

まあ、彼女たちの一番すごいところと、重要なところは別にあるんだけどね。

それはまだ秘密ということだ・・・。

『ところで一歩、少し怪我してるけど、どうしたの？』

「ん、ああ、これね。いつものシスコンとの喧嘩だよ。気にしないでくれ。」

『ああ、それなら安心ね。相変わらず仲がよろしくて大変結構。』

「仲がいいって、勘弁してくれよ。それより、頼んでおいた物はどうなっている？」

『例のモノなら、現在の進行状況はヴェルダンデーとDr・秋葉原率いる第1メダロット開発室の方が約84%、スクルドとDr・レッケン率いる第2メダロット開発室の方が約81%ってところかしらね。』

「予定よりも随分早いな、それなのに出来の方は予想の上を言っている……。開発室の彼らに少しは休むように言ってくれ。どうせ連中は碌に寝てないんだろからね。なんなら強制的に一週間休暇にしてもかまわない。で、休暇のその後で現在のお互いの進行状況を伝えておいてくれ。最初に出した企画以上のモノを作ってくれるはずだからね。」

『りょくかい。すぐに伝えるわね。』

「まったく、あの二人ときたら。お互いに負けたくないからって、少しは自分の体の事を考えろっての……。若くないんだからさあ。」

「誰が若くないって。」

「うおお?!、ビックリした!なんで此処にいるの!？」

いきなり現れたこの二人は、メダロット博士こと秋葉原 亜土夢あきはまゆみさんと、ヘベレケ博士ことヘッバー・レッケンさんだ。二人ともその道では有名な人物であり、現在では第1と第2のメダロット開発室の室長をもらっている。

「ふん、ワシはただ報告に來ただけじゃわい。こっちのヘベレケじいの方は知らんがのお。」

「はん、わしの方も今さっきの実験で出た結果を報告に來ただけじゃ、自分の方が早く進んでいると思ったら大間違いじゃ。大体なんじゃそのサングラスは、似合つとらんのお。」

「……上等じゃ！表出ろやあ！！」

『オジイ様方、喧嘩をするのはおやめください。ただええお疲れなのに、怪我でもされたらどうなさるおつもりですか。』

そう言い二人をなだめているのがベルダンディー。二番目に作られたマザーメダルである。

彼女はおっとりとした性格で、誰に対しても優しく接してみんなから好かれている。

「む……じゃがのお。」

『そうよ……おじいちゃん達に何かあったらあたし達泣いちゃうんだからね……』

そして彼女はスクルド。三番目に作られたマザーメダルである。彼女はまだ作られてから、さほど時間がたっていないため性格も幼く、よくヴェルダンディーに甘えている。ウルドはよくちよっかい

をかけられているので、反抗期の小学生みたいな感じで接している。

「いや、しかしなあ。」

『二人とも、ウチの妹達もこう言っているんだから、あまり無理しないですよ。私達とは違って、人間には替えがきかないんだから……』

「う…、うむ。」

「そ、そうじゃのう…。」

「じゃ、じゃが、今さっきの言葉は許さんぞ!」

「そ、そうじゃ! お前たちだって変わりはおらのじゃ! その言葉を取り消せ!」

『え? いや、でも私たちは』

「そくだよウルド、今は君が悪い。」

『マスター……』

「君達は僕にとって家族のような存在だ、それに博士たちにとつては娘といっても過言ではないはずだよ。」

「うむ、一步の言つとおりじゃ。」

「わしらはお前たちを娘と思っておる。その娘に変わりなどおる訳ないじゃろつが。」

『二人とも…。ごめんなさい、それから…。ありがとう。』

「分かってくれたならいい。ワシもムキになっとったからな。」

「わしもだ。」

「おい、ヘベレケどうせワシ等はしばらく休みじゃ。今日は飲むのを付き合え。」

「ふん、いいじゃろう。ここは一つ飲み比べと行こうじゃないか。」

「受けてやるわい。という訳じゃ一歩。後の事はヴェルとスクルドに聞いといてくれ。」

「了解です。それでは良い休日を。」

「お前さんもな。」

そういつて二人の博士は部屋を出て行った。

ん、お前さんも？

『そうよ、ア・ン・タもよ。私と一歩の率いるメダロット開発統括室の進行状況は約89%。だからあの二人と同様に休みを入れさせてもらったは。』

「なんですか？」

『あんたも、ここ最近は徹夜が多いし。子供なんだからしっかり体を休めなさい。背伸びないわよ。』

「いや、まあ、そうかもしれないけどさあ……。」

『それに私達と同じで、一步さんにも変わりはありません。どうかご自愛の程を。』

「あゝ、うん、分かったよ。人様に言いた手前だからね。じゃあ、しばらくお仕事はお休みするよ。」

『うんうん、そうだよねえゝ。一步に何かあったら歩ちゃんに申し訳がないもんねえゝ。』

「そこ、なんで歩が出てくるんだ!!」

『だって、『ねえゝ。』』』

くっ、こいつらもすっかり母や妹達に毒されてやがる。早く何とかしないと……。

(side end)

第三ロボット：外堀埋めてもよろしいですね？（後書き）

はい皆さん、ハル マキです。久々に投稿します。

リアルが忙しいとはいえ、もう少し早く投稿したかったです。
さて、今回は少し時間が飛びますがよろしいですね？
それではまた次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0107t/>

リリカルうー、マジカルうー、ロボトルうー、ファイトおー!!!!

2011年10月9日01時40分発行